日本栄養士会災害支援栄養チーム(JDA-DAT)の大阪スタッフ養成研修会に参加して

昨年の東日本大震災から1年8か月が経った今なお、復興の兆しさえ見えない途方もない災害である。

関西圏は、南海トラフ地震が何時起こるかもしれない恐れがあり、防災意識を高まってきている中、9月5日には「大阪880万人訓練」が実施されたところである。

日本栄養士会においては、東日本大震災発生後、ボランティアを募集して現地に管理栄養士を派遣した。

日本栄養士会災害支援チーム（以下、JDA-DAT）の養成研修の一環として、大阪スタッフ養成研修が企画され、10月14日大阪で、その開校式及びに研修が実施された。今後来年3月末までに3回の研修が予定され、また、リーダー養成研修として別途第2回JDA-DATリーダー養成研修が2日間神戸市、三田市（兵庫県広域防災センター）にて11月17・18日で行われる。今後養成研修を受けたリーダー＋スタッフがチームを編成し、災害栄養支援をしていくことになる。

以下、大阪で開催された初日第1回目の養成研修要旨である。

「災害とは、災害医療、災害栄養管理」について、独立行政法人国立病院機構南京都病院、栄養管理室長の松井欣也氏から現地体験をもとに報告・講演があった。

災害サイクル（災害が発生してからの時間経過）は、①急性期→②亜急性期→③慢性期・復旧復興期→④静穏期→⑤前兆期に分かれる。この各期に適切な医療が行われることによって、心身状態など悪化を防ぐことができると考えられている。

災害サイクルにおいて、私たち管理栄養士は「災害栄養管理」を災害医療スタッフと共に活動支援する必要がある。

避難所現場では、排水の問題から、カップラーメンの汁を全部飲み干さなければならない状態となり、高血圧になる人も多かった。また配布された食料（菓子パンなど）によって糖尿病の血糖コントロール不良であったり、慢性期では褥瘡の方も多かったとの報告があった。

「災害栄養管理」の考え方は災害サイクルの経過に対応できるスキルが必要である。また災害現場では、もつとも大切だとされている「ヒューマンスキル」を養うことが大切である。それは、よりよい人間関係を築くために必要な能力と技術であるという。

次に、独立行政法人国立病院機構大阪南医療センター大幸聡子氏から、「JDA-DATの意義と役割」について話があった。

JDA-DATとは、「災害発生地域において栄養に関する支援活動ができる専門トレーニングを受けた栄養支援チーム」と定義している。急性期（概ね72時間以内）に活動し、機動性を有する。被災者に栄養支援を行うものである。だが今回の災害支援活動において、課題も見えてきた。

①避難所（集団）の栄養状況の把握と格差の是正　避難所によって食料配給物資の格差（多少）があった②避難所（個別）の栄養状況の把握と対応③在宅等医療チームとの連携④被災地施設等への栄養・物資等支援などがそうである。

被災地へ向かう場合には、まず情報収集をしていくこと。誤った情報発信は災害対応期間を危険に晒すので注意が必要。

今後、避難所への食料の配給は、現地の行政と府県の栄養士会等関係団体とが連携し、栄養管理の観点を含めた適切な対応が望まれるところであると感じた。

（文責　福祉　米谷佳彦）